

## 附論2 法楽寺遺跡出土の銅印・金銅三尊仏・銅製磬について

倉沢 正幸

### 1 銅印

法楽寺遺跡の第17号溝跡覆土中から出土した銅印（第1図）は、印面の大きさが縦2.8cm、横2.8cm、高さ2.8cm、重さ35.8gで、一部が腐食のため欠損しているが、ほぼ完全な形で検出された。出土した溝状遺構からは10世紀代の遺物が出土しており、本銅印は10世紀代の資料と位置付けられる。四角な印面には、四文字が鋳出されていた。

そのため、平成12年2月2日に国立歴史民俗博物館の平川南教授（現在、同博物館副館長）・永嶋正春助教授に文字の解読・銅印の化学分析の調査を依頼し、ご教示をいただいた。この調査結果については、平川南氏が「長野県内出土・伝世の古代印の再検討」（『長野県考古学会誌 99・100号』長野県考古学会2002年）で詳細に考察されている。この考察によると、本銅印は、「宍口私印」と判読でき、口は「来」または「未」の文字とされている。この四文字は、「ウジの頭文字+名の頭文字+私印」とされ、ウジの頭文字「宍」は、「宍人部」の頭文字と考察されている。宍人部については、『日本書紀』の雄略天皇二年十月条に狩の鳥獸を調整するために宍人を置いたとある。また、千曲市の屋代遺跡群から出土している7世紀末の第13号木簡にも「宍人部」・「宍部」といった部姓がみられることが指摘されている。「宍人部」は文献史料によると大和・山背（山城）・駿河・伊豆・武藏・越前・伯耆などの諸国にみられることが指摘されている。平川氏は、屋代遺跡群出土の木簡にみられる「宍人部」は宮廷で鳥獸の肉の調理に携わった宍人の資養を負担する部と考察されている。また、信濃国は『延喜式』や『藤原宮木簡』によると、調庸物や交易雜物などの名目で鳥獸の肉や皮を貢進していた事が知られると指摘されている。さらに、古代の信濃国には鳥獸肉の貢納に従事する民が広く分布し、埴科郡内の屋代遺跡群出土木簡・小縣郡内の本銅印の出土によって、宍人・宍人部（宍部）が両郡内にも分布したことを証明できると考察されている。また、永嶋正春氏によるX線透過検査・蛍光X線分析によって、銅（Cu）を100として、ヒ素（As）4.0・鉛（Pb）1.0・銀（Ag）0.25・錫（Sn）0.10・ビスマス（Bi）0.25・アンチモン（Sb）0.15の成分である事が判明し、古代の銅印の範疇に入る資料であることが自然科学的調査によっても確認されている。

前述したとおり、銅印の「宍」の文字については食用の獸肉をさし、特に食肉のために捕獲する猪（いのしし）・鹿（かのしし）の肉をさすとされている。上田市内では、史跡信濃国分寺跡に包含される明神前遺跡より「宍」（第2図5）と判読される墨書き土器が1点出土している。（上田市教育委員会『上田市文化財調査報告書第85集中市内遺跡 平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』2001年）この墨書き土器は、史跡信濃国分寺跡の個人住宅改築による現状変更申請に伴う試掘調査で出土した。調査面積は200m<sup>2</sup>で、古墳時代後期と平安時代前半と思われる堅穴住居跡が5軒検出された。出土した墨書き土器は、口径16.0cm（推定）・器高5.0cm・底径6.4cmで、内面に黒色処理が施された土師器の体部外面に正位で「宍」と書かれている。底部は回転糸切りの後、範調整され内面は丁寧な範磨きが施されている。その形態から9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる資料とみられる。この「宍」の資料の他に、「北」（第2図3）・「中」（第2図4）・「仲」（第2図8）・「口口舟口」（第2図7）の墨書き土器が出土している。さらに、「完」・「宍」・「閑」のいずれかの文字とみられる墨書きが施された土器（第2図6）も出土している。

平成12年度の明神前遺跡調査地点（第3図）は、尼寺跡の北西側に隣接しており、昭和46年の調査地点から南西側に約30m離れているが、両者は一体の遺跡と考えられる。昭和46年の調査（上田市教育委員会『信濃国分寺-本編-』吉川弘文館1974年）でも「仲」・「舟」・「講院」・「子」・「寶」・「人」・「仙」・「八」・「八千」と墨書きが施された土器が出土し、平成12年にも出土した「仲」・「口口舟口」と墨書きが施された土器との共通性が注目される。明神前遺跡の性格については、昭和46年の調査でタタラ跡や轍の羽口・鉄滓・釘・鎌・鍬先などが

出土し、鍛冶工房跡の存在が推定されている。この場所は、国分寺官署施設の修理院などの可能性が考えられ、信濃国分寺の付属施設の一部と推測される。昭和46年の調査では堅穴式建物跡9軒・カマド7基・焼土層4ヶ所が検出され、出土した土師器・灰釉陶器などから9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる遺構と推定されている。なお、昭和51年には8世紀後葉の堅穴住居跡1軒、昭和63年には10世紀代の堅穴住居跡2軒が確認されている。こうした遺構がみられる明神前遺跡から「宍」と書かれた墨書き器が出土したことは、宍部・宍人部との関わり・法楽寺遺跡との関係などの重要な検討課題を含んでいる。

さて、猪・鹿に関する事象をみると、法楽寺遺跡から南西方向約2kmの地点の黒坪地区には、「猪」の地名がある。この「猪」の字の地区からほぼ真北方向に「猪垣」が通じ、条里的水田遺構がこの付近にみられる。(上田市教育委員会『条里遺構分布調査概報 -神川東部地区・浦野川地区-』1976年) この条里的水田遺構の構築時期は古代あるいは中世とされ明確ではないが、「猪」という地名は注意が必要である。また、鹿については、丸子町腰越の国史跡の鳥羽山洞穴遺跡から、鹿角製紡錘車・鹿角製鳴鏑・鹿角装刀子・鹿角装劍が出土している。伴出した土師器・須恵器から古墳時代の5世紀代の資料(永峯光一「鳥羽山洞穴遺跡」『長野県史考古資料編 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会1982年)とみられ、古墳時代における鹿との関わりが窺える。上田・小県地方では、近年でも山沿いの集落では猪や鹿による作物への食害が知られている。本地方でも、『延喜式』の調庸物などの記載の様に、奈良・平安時代には多数の猪・鹿が生息しており、宍人や宍人部・宍部と深い関わりがあったと推測される。さらに本遺跡からは明確な獸骨だけでも38ヶ所から出土し、他の遺跡に比べて出土数が多いと指摘されており、今後の検討が必要とされている。

長野県内では、長野市篠ノ井塙崎の篠ノ井遺跡群出土の「大半(伴?)」印(9世紀前半)・松本市三間沢川左岸遺跡出土の「長良私印」印(9世紀後半)・千曲市更埴条里遺跡出土の「王強私印」印(9世紀後半～10世紀初頭)・南佐久郡臼田町清川出土の「物部楮丸」印・諏訪大社下社伝世の「賣神祝印」印の5例の銅印(国立歴史民俗博物館『同館研究報告79 日本古代印の基礎的研究』1999年)が知られており、本銅印を含めると6例目となる。所属時期の判明している銅印は、いずれも9世紀～10世紀代の平安時代前半の資料である。なお、厳しい管理のもとに鋳造された公印に対して比較的自由に製作することのできた私印の印章鋳型が、埼玉県花園町の台耕地遺跡・千葉県千葉市の谷津遺跡・群馬県前橋市および群馬町の国分寺尼寺中間地域遺跡から出土(田路正幸「考古資料としての古代銅印について」『国立歴史民俗博物館研究報告79』1999年)し、有力者の存在した集落内の鋳物師工房でも鋳造されたことが確認されている。桐原健氏は篠ノ井遺跡群出土の「岑」の刻書・墨書き器の分析や松本市下神遺跡の則天文字の検討などから自墳地系莊園形成の基礎づくりを行った「富豪の輩」が私印を所有し、私印の所有者を集落内の有力者と推察している。従来、私印の価値については過大評価される傾向が強かったが、径150m程の圏内で20軒前後のグループの長でも私印を鋳造して使用することができたとする桐原氏の考察(桐原健「古代信濃の私印所有者」『信濃』第55巻11号2003年)は、この法楽寺遺跡の銅印の事例にも適合すると考えられる。

## 2 金銅三尊仏

法楽寺遺跡から出土した金銅三尊仏(第4図)の出土地点は不明である。これは、極めて小さな小金銅仏で、中央に宝冠を付けた阿弥陀如来座像・向かって右側に觀音菩薩立像・左側に勢至菩薩立像を配した三尊仏である。三尊仏の総高7.1cm・総幅8.7cmである。中尊の阿弥陀如来座像の法量は総高7.1cm・像高4.1cm・台座高3.0cm・面長0.8cm・頭頂から顎までが1.8cmである。この座像は土中への埋没による摩耗や鋲の付着が著しく、像容は判然としない。向かって右側の觀音菩薩立像は総高4.3cm・像高3.9cm・台座高0.4cm・頭頂から顎までが0.9cmで、左側の勢至菩薩立像も同一の大きさで両像とも摩耗や鋲の付着が著しく、像容は判然としない。中央に位置する阿弥陀如来座像の框座の両脇から直径0.6cmの蓮茎が伸び、両脇侍の台座を支えている。阿弥陀如来座像の框座の底部法量は、奥行3.6cm・幅4.4cm、台座の法量は奥行3.1cm・幅3.5cmである。ま

た両脇侍の台座の法量は奥行・幅共に1.5cmである。阿弥陀如来座像は、腹部の前で定印を結び、結跏趺坐している。袈裟は左肩を覆っており、右肩をあらわしたいわゆる偏袒右肩の姿である。三尊仏全体の重量は197.8gで、表面には鍍金が施された小金銅仏である。その形状から、前後合わせ型の一鋸造りと考えられる。

こうした小金銅仏は、7世紀後半の白鳳時代から平安時代まで、全国で210点ほどが確認されている。これらの中では、釈迦如来像と阿弥陀如来像が多く全体のほぼ四割を占める。阿弥陀如来像は11世紀～12世紀の平安時代後期に多数製作されている。(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『古代の誕生仏』1978年・埼玉県立博物館『甦る光彩 関東の出土金銅仏』1993年・大島正之「平安時代末期の小金銅仏」『山梨考古学論集IV』山梨県考古学協会1999年)これらのうち、本三尊仏と極めて共通性が高いと思われる宝冠阿弥陀如来座像として、和歌山県那智勝浦町の那智経塚出土座像・山梨県敷島町の松ノ尾遺跡出土座像があげられる。那智経塚出土宝冠阿弥陀如来座像(奈良国立博物館『山岳信仰の遺宝』1985年)は、平安時代の12世紀の資料とされている。脇侍の観音菩薩立像が残存した資料(東京国立博物館蔵)と中央の阿弥陀如来座像のみが残存した資料(熊野那智大社蔵)に本三尊仏との共通性が高い。松ノ尾遺跡出土宝冠阿弥陀如来座像(大島正之『松ノ尾遺跡』敷島町教育委員会1996年)は2体出土している。このうち第2号の仏像は、総高7.2cm・像高4.1cmで、法楽寺遺跡出土の中尊の法量とほぼ同一であり像容も近似している。この像は中尊のみであるが台座の框の両脇部には欠損が認められ、その形状より本来は一茎三尊形式の阿弥陀三尊像であったと推察されている。両像とも、出土状況や製作技術などから11世紀末～12世紀初頭の資料とされている。

長野県内の三尊形式の小仏像としては、長野市松代町の個人所蔵の宝冠阿弥陀如来座像、松本市平瀬遺跡出土の平安時代の銅製三尊仏(澤柳秀利他『平瀬遺跡II』松本市教育委員会2000年)などの事例がある。長野市の仏像は像高が8cmで、台座の裏面に建久二年(1191)八月の銘がある。(長野市立博物館『古代・中世人の祈り -善光寺信仰と北信濃-』1997年)その形状をみると現在は中尊のみであるが、本来は一茎三尊形式の宝冠阿弥陀如来座像であったと推定されている。この資料は信濃国分寺資料館の平成15年特別展「上田・小県地方の山岳信仰」に出品されている。その際に計測がなされ、像高8.0cm・頭頂から顎までが3.0cm・首から膝までが3.4cm・台座高1.6cmであった。頭部は宝冠部高1.6cm・面長1.4cm・面幅1.6cm・肩幅2.9cmであった。所蔵者の家はかつて修験に關係していたとされている。像容は摩耗などで判然としないが、一茎三尊形式の宝冠阿弥陀如来座像である。松本市の平瀬遺跡出土の銅製三尊仏は、高さ9.8cm・幅8.2cmで、一本の茎から三本に分岐した茎の上部に像が製作されている。平安時代後期の堅穴住居跡から出土しており、その形状から念持仏として台上などに安置された可能性が推測される。

法楽寺遺跡出土の小金銅仏は、その形状や技術から那智経塚や松ノ尾遺跡出土の仏像と同様に、11世紀末～12世紀の平安時代後期に位置付けられる資料と推察される。永承7年(1052)に末法の世にはいるとされた末法思想が当時の人々の間に急速に広まり、極楽往生を求めて阿弥陀如来の信仰が高まっていた。この仏像も個人が身近に置いて礼拝する念持仏として、当時用いられた可能性が推測される。また、平安時代後期の宝冠阿弥陀如来および左脇侍立像の鋳型が栃木県芳賀郡市貝町の多田羅遺跡から出土しており、当時信仰の隆盛を背景に宝冠阿弥陀如来像が大量に製作されたと指摘されている。(林宏一「出土金銅仏 -関東地方を中心に-」『甦る光彩 関東の出土金銅仏』埼玉県立博物館1993年)一方、上田市国分の国分遺跡群からは、平成11年に錫杖鋳型が出土して注目された。(上田市教育委員会『国分遺跡群』2002年)この遺跡は現在の信濃国分寺境内から北方へ約100mの地点にあり、信濃国分寺との関係が注目されている。9世紀～10世紀の平安時代前期のものと位置付けられる3点の錫杖鋳型は包含層から出土した。同時に轔の羽口・鍛治滓・銅滓などの遺物も出土しており、信濃国分寺に關係した法具を製作する工房が所在したと推測される。法楽寺遺跡出土の金銅三尊仏も関東地方の事例等から、当地方の在地の鋳物師工房によって製作された可能性が考えられる。また、法楽寺遺跡からは、轔の羽口や碗形滓・粒状滓などの鍛治滓、さらに鉄鎌・刀子・鎌・苧引金などの鉄製品の出土もみられる。鍛冶関連遺構として、SK253・SK330の土坑が考えられている。このため本遺跡でも小鍛冶が行われ、

鉄製品が集落内で調達された可能性が高いと考えられる。

### 3 銅製磬

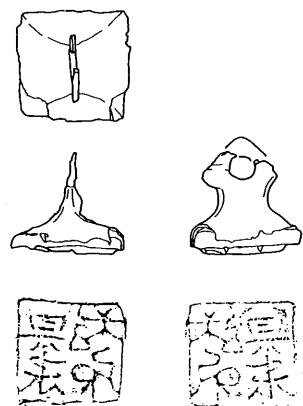
法楽寺遺跡から出土している銅製磬（第5図）の出土状況は明確ではない。磬は銅の鋳造製で、山形の中央に撞座があり、その横に草花文と上に蝶が舞う文様が表現されている。上縁には鈕孔が2箇所ある。磬は欠損部分の法量を推定すると、横幅（絃）17.3cm・縦（博）の長さ9.1cm・上部の肩間の長さ13.6cm・側縁の高さ6.4cm・中央下部の股入の長さ2.8cmであったと思われる。上縁の鈕孔は直径9mm・孔の径4mmである。中央部には、直径4.5cmの八葉複弁蓮華文を表現した撞座がある。蓮華文の蓮弁は、幅が1.4cm～1.8cmと不揃いである。器面は、使用されたことによる摩滅が進行している。中房の内部には、1+4の蓮子が表現されている。蓮子は径が0.4cm程度で、形はやや不揃いなものである。この磬は、表裏に同様の文様を表現した両面磬である。表面に向かって右側が2/5程度欠損している。全体に薄手の磬で、厚さは周囲の縁が最も厚い箇所で3.2mm、上部中央部の薄い部分が厚さ0.9mmである。この磬の薄さは類例が少なく、この磬の大きな特徴といえる。本磬に鋳出されている八葉複弁蓮華文の文様は、信濃国分寺の創建期の軒丸瓦にも用いられている。この軒丸瓦の中房の蓮子は、1+6で表現されている。磬の蓮子の表現とは異なるが、信濃国分寺跡から直線で北東へ約3.2kmの地点にある法楽寺遺跡出土の磬の撞座に軒丸瓦のそれと類似した八葉複弁蓮華文があることは注目される。なお、本遺跡からは、信濃国分寺跡出土の平瓦・丸瓦に極めて類似した瓦が出土している。出土数が少なく破片であるが、信濃国分寺から何らかの理由で持ち込まれた可能性が高い。両寺院の関連性が窺える資料である。

本資料は、平成13年4月24日に東京国立博物館法隆寺宝物室長の原田一敏氏（現在、同館上席研究員）に実見していただいた。その結果、極めて薄手であり、裾が開いた形状等から平安時代後期の12世紀後半に位置付けられる「花卉蝶鳥文磬（かきちょうちょうもんけい）」とのご教示をいただいた。また、撞座の横にある蝶の図柄は横向きで、平安時代の鏡にみられる蝶と共通性があること、その下方の草花文は鏡の文様と共通するが、鏡の文様の方がより繊細さがあること、草花文は植物の葦をかたどったようにも見受けられるとのご指摘もいただいた。この様な横向きの蝶の図柄は、埴科郡坂城町の北日名経塚出土の鏡（米山一政「北日名経塚」『長野県史考古資料編 主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会1982年）の裏面の文様にもみられる。この遺跡からは7面の鏡が出土しており、荻蝶鳥鏡に分類される鏡の文様の中に蝶の図柄（前掲文献の写真図版第2図9）が認められる。この経筒の蓋には保元2年（1157）の平安時代後期の銘が陽刻されており、12世紀後半とされる本磬の年代と同時期である。隣接する坂城町からの出土でもあり、注目される。

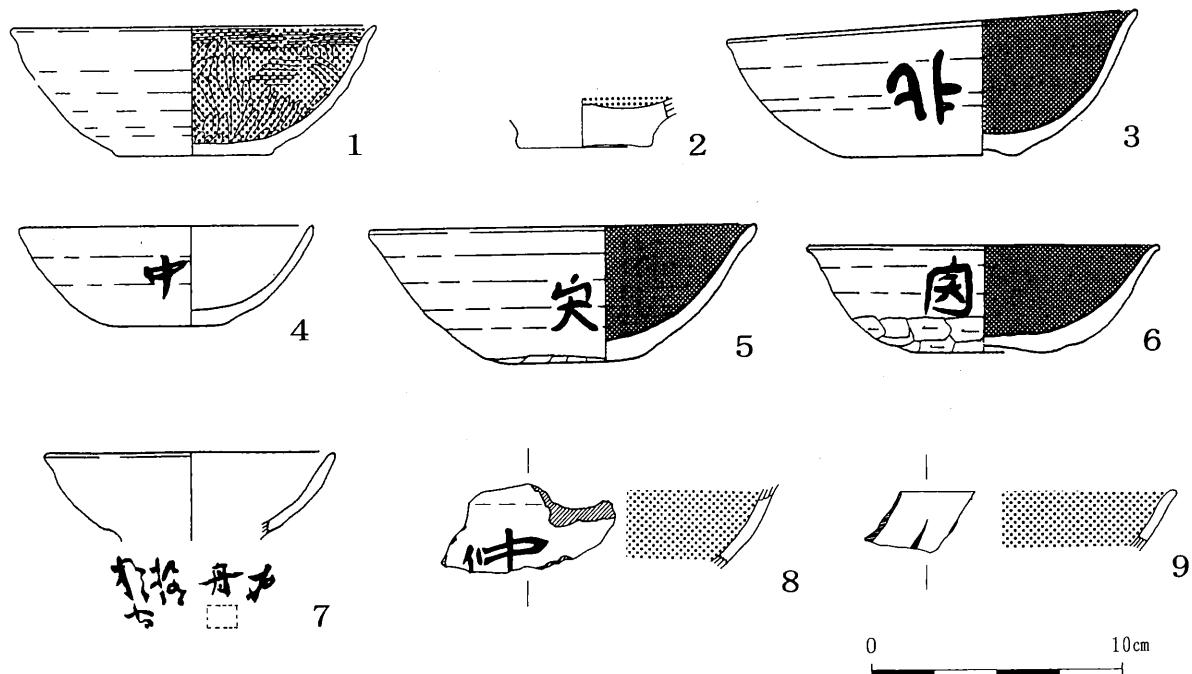
さて、磬は吊り下げて打ち鳴らす仏具で、俗に「うちならし」ともいわれている。元来は中国の古い打楽器で石製や玉製のもので、後に銅製や鉄製のものが使用された。わが国に伝えられてからは主として仏具として用いられ、仏堂内で磬架にかけて使用された。古代の磬は銅製のものがほとんどであり、多くは鏡造りの工人によって製作されたと推測されている。（香取忠彦他『仏教考古学講座 第5巻 仏具』雄山閣1984年）長野県内では、昭和10年に松本市宮淵から長保3年（1001）銘のある鰐口とともに出土した蝶をかたどった大形の蝶形磬（東京国立博物館所蔵）が出土し、国重要文化財に指定されている。また松本市新村の旧専称寺跡から出土した孔雀文磬（くじやくもんけい）が松本市立博物館に所蔵されている。この磬は全体の形状から12世紀末の鎌倉時代初期の製作と推定され、国重要文化財に指定されている。当時の磬の図柄は孔雀文が多数を占め、法楽寺遺跡出土のものと平安時代後期の花卉蝶鳥文の磬は類例が少なく、その意味からも本資料は貴重な資料と考えられる。法楽寺遺跡からは、この銅製磬をはじめ、金銅三尊仏・銅製碗・五輪塔などの遺物が出土しており、「法楽寺」・「堂下」などの地名の存在から、平安時代から中世にかけて寺院がこの地域に存在したことが推測される。また、本遺跡から出土している五輪塔は、その形状から14世紀後半～16世紀代の造立に位置付けられ、同じく出土した永楽通宝、洪武通宝の明錢から16世紀までは寺院か、墓が営まれていた可能性が指摘されている。現在、この寺院については文献などでは確認はできないが、こうした出土資料の分析などを通して、今後そ

の解明が期待される。

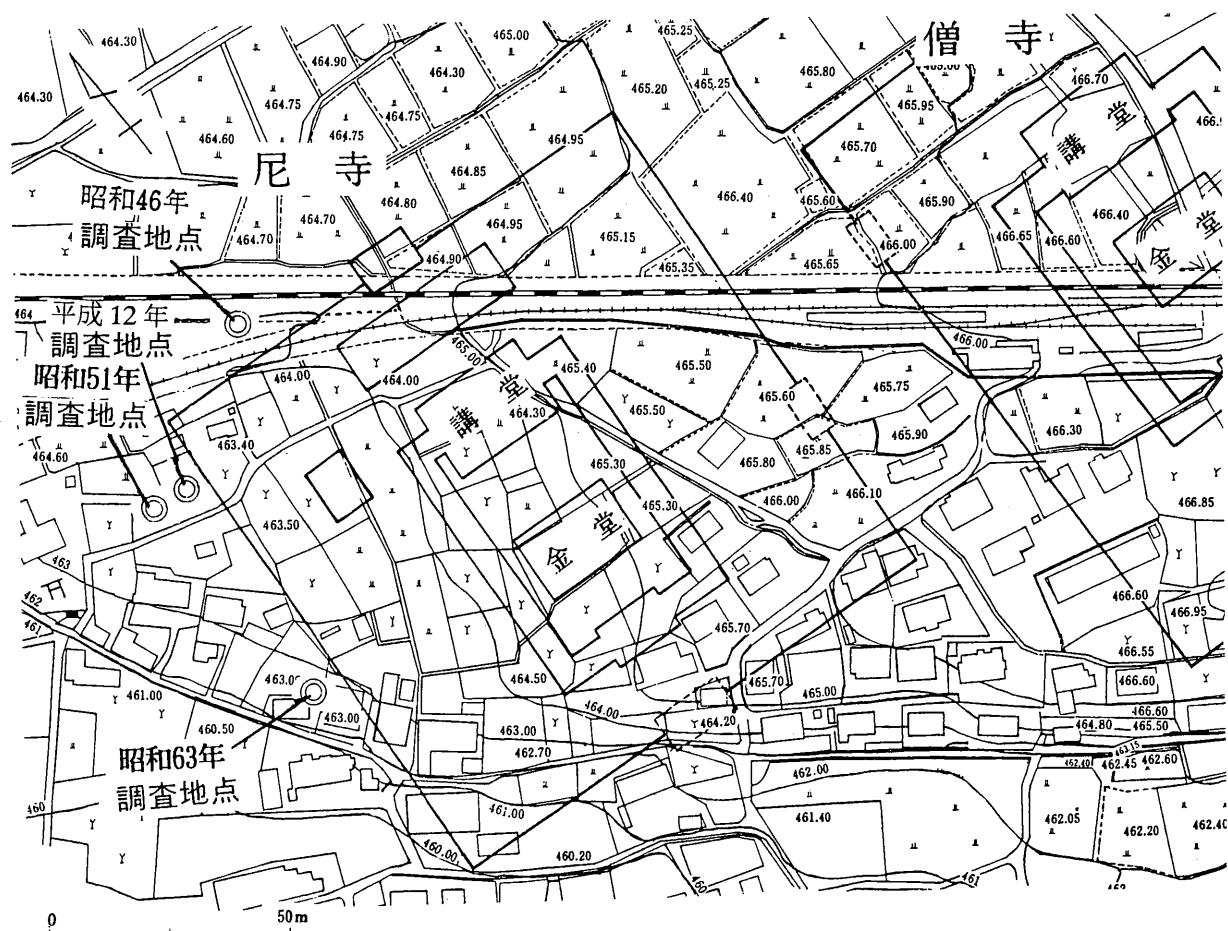
なお、出土遺物につきまして、ご指導、ご教示いただきました国立歴史民俗博物館の平川南氏、永嶋正春氏、東京国立博物館の原田一敏氏、帝京大学山梨文化財研究所の畠大介氏、上田市誌編纂副委員長の桜井松夫氏、上田市誌編纂室長の川上元氏の各先生方に、厚くお礼申し上げます。



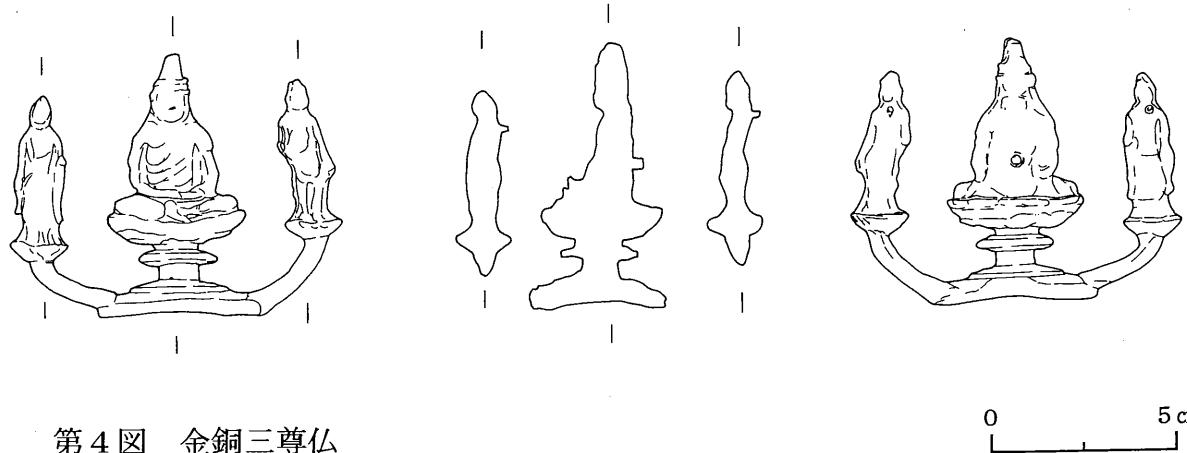
第1図 銅印 縮尺：1/4



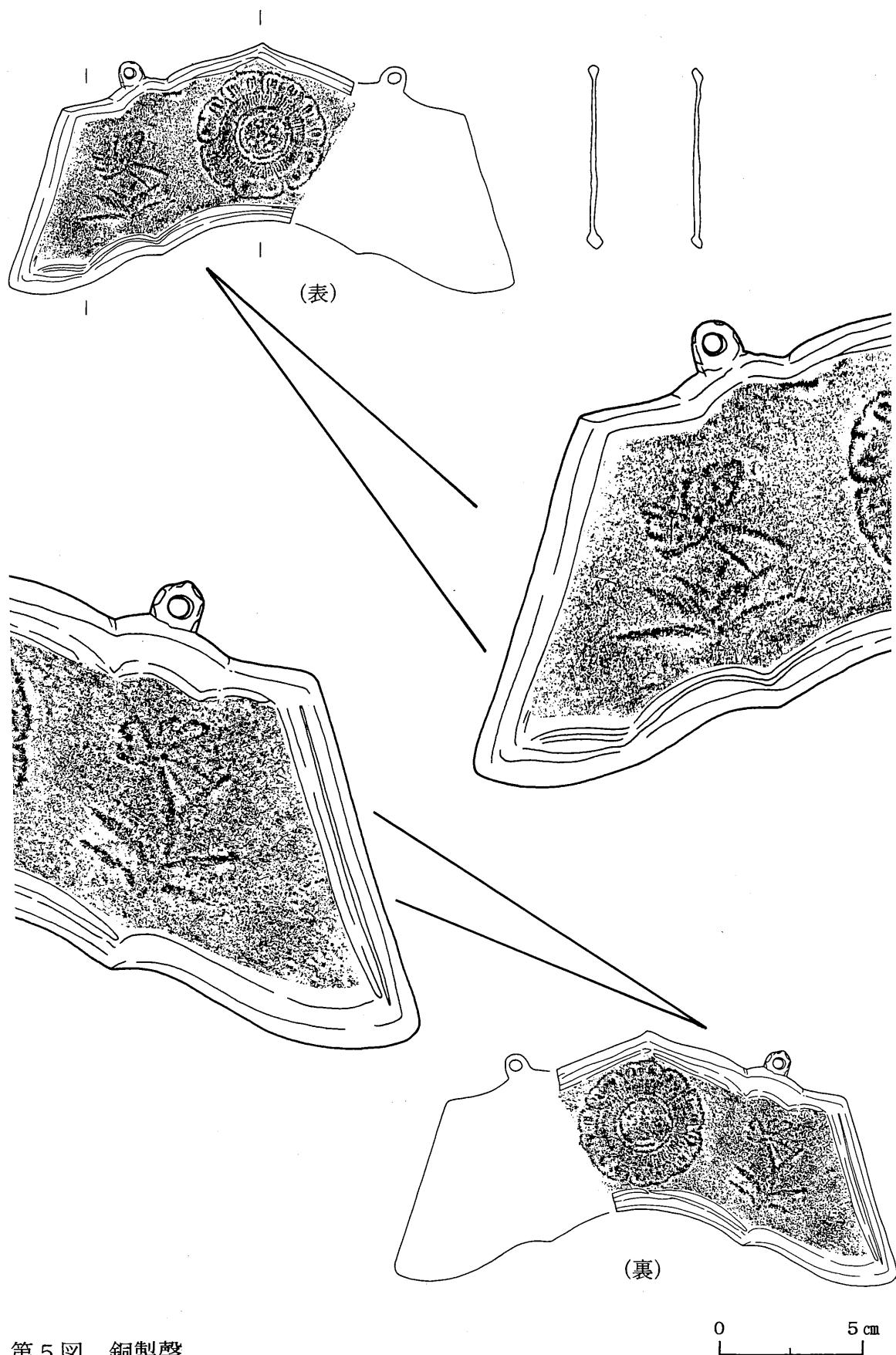
第2図 信濃国分寺跡（明神前遺跡・平成12年度）出土遺物  
(上田市教育委員会『市内遺跡 平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』  
2001年より引用・一部改変)



第3図 明神前遺跡調査地点



第4図 金銅三尊仏



第5図 銅製磬